

「バス利用のススメ」

東京工業大学 藤井 聡

「バス」と言えば、皆さんはどの様な印象をお持ちだろうか——？

昔は良く乗ったことがあるが最近はほとんど乗ったことが無い乗り物、昔からほとんど利用したことがない「よそよそしい存在」、あるいは、クルマを使えないので仕方なく使っ
てはいるが、頻度が低く、何とも使いにくい「不便な交通手段」であろうか。

いずれにしても、おそらくは多くの人々にとって「バス」という存在は、現在の暮らしとはほとんど関係の無い存在となっているのではなからうか。それ故、なぜ、バスが今現在、そういう「陰の薄い存在」になってしまったのかという理由について、考えを巡らせた方もまた、大変少ないのではないかと思う。

現在バスの陰が薄くなってしまった本質的理由——、それは、大多数の人々が「クルマ」を中心として暮らすようになったこと、である。

想像していただきたい。もし仮に、皆がクルマを使っていなければ、我々のまちが、どの様なまちであったかを——。もしそうであるなら、言うまでもなく人々は、ごく自然にバスを利用する。例えば数十年前、あるいは、高度成長期前後の時代にあつては、誰もクルマを持っていなかったのだから、皆がバスを使うのも必然である。

そしてもし、人々が自然とバスを使う社会であれば、人々が出かける先は必然的に、「バスで行きやすいところ」となる。言うまでもなく、「バスで行きやすいところ」とは、「中心市街地」や「駅前の商店街」等である。これこそが、クルマが無かった頃のかつての多くのまちが、「もっと活気づいていた」ことの本質的理由である。私たちは、クルマ中心の暮らしではついつい郊外のショッピングセンターの様な所で買い物をしてしまうのである。

もちろん、クルマを中心とした暮らしは、とても便利である。時間を気にする必要も無いし、雨風はしのげるし、夏も冬もクルマの中のエアコンのおかげで快適な移動をすることができる。

しかし、私たちは、そうしたクルマの「圧倒的な便利さ」と引き替えに、様々なものを「失ってしまった」ことに十分に気がついていなかったのではなからうか。

私たちがクルマばかりを使っているうちに、バスの利用者は激減し、その結果、経営が厳しくなったバス会社は事業を縮小せざるを得なくなった。そうしてバスの利便性が大きく低下してしまうと、人々の流れは「まち」から「郊外」へと流れてしまうようになり、その結果、まちの活力は低下してしまった。無論、地球温暖化の観点から言うなら、クルマ利用はバスよりも格段に多量のCO₂を出す。そして個人の健康の点で言うなら、クルマを使っただけでいるうちに日常の運動量が大幅に低下してしまうことが最近の研究から明らかになっている。つまり、クルマばかりを使っているうちに、人々の健康も、地域の公共交通の利便性も、まちの活力も低下してしまい、挙げ句には温暖化問題を助長することともなってしまったのである。

もしもこうしたことに少しでも関心を持たれた方がおられたとするなら、まずは、週に

一度でも、月に一度でも、あるいは年に一度でも、クルマの代わりに身近な「バス」で出かけてみてはどうだろうか。もちろん、クルマが便利であることは間違いない。しかし、皆がバスを少しずつでも利用するようになれば、私たちの「まち」は、少なくともその分だけ豊かな方向に変わり、それを通じて私たちの「暮らし」もまた、少なくともその分だけ豊かになっていくこともまた間違いない。小さなことではあるが、一人ひとりがバスを使ってみることは、私たちの豊かなまちと豊かな暮らしに確実に繋がる一歩となるのである。